

# おぼろげな平塚らいてうの会ニュース

発行  
平塚らいてうの会  
〒112-0002  
東京都文京区  
小石川  
5-10-20-5F  
TEL・FAX  
03-3818-8626

## 「女性」「平和」「地域」をテーマに

### 第13回総会報告から

平塚らいてうの会会長 米田佐代子



今年「青鞆」創刊100周年、らいてうの家オープン5周年の年です。東日本大震災と原発事故が東北地方をはじめ日本全体の人びとの暮らしを脅かしている今、「青鞆」の人びとの思いを受け継ぎ発展させるため、5月14日の総会で「女性」「平和」「地域」の3つの視点から活動をすすめるよう話し合いました。また総会後に、「らいてう忌」の催しとして、らいてうのお孫さんに当たる築添美土さん、美可さんをお招きして「祖母らいてう」と「母嚙生」について感銘深いお話しをうかがうことができました（4面に掲載）。

「青鞆」とらいてうの再発見・女性の交流活動をすすめてみましょう

らいてうの遺品から貴重な資料が発見されています

ます。それらを通じて現代の私たちの生き方暮らし方をどう築いてゆくの、女性が社会・家庭・地域のなかで力を発揮するにはどうしたらいいかを考え、学び、交流しましょう。

らいてうのころざしをうけつぐ平和の活動にとりくみましょう。

昨年はNPT再検討会議に向けて核廃絶を求め活動に参加し、今年は広島でひらかれる第57回日本母親大会で「青鞆百年」を記念してらいてうの平和への思いをつなぐ特別企画にとりくみます。「らいてうの家」で9月4日に開かれる「青鞆」100周年記念のイベントでも、出演者のみなさんが「平和」への思いをうたい上げます。各地で平和の活動をすすめる施設との交流もすすめてみましょう。

地域に根を下ろした人びとの暮らしを育てる活動をひろげましょう

らいてうの家のすばらしい自然環境を生かし「地域の方がたに愛され利用される施設として育てよう」「地域の女性たちの生きてきた歴史を語り合い、確かめ合う活動を広げよう」という方向をめざしましょう。

「会」と「家」の今後のあり方をめぐって

「会」も「家」も維持運営は前途多難です。今は会員のボランティアと会費はもとより、多くの方

がたからのご寄付などによって支えられています。自立できるだけの財政基盤はむずかしいのが現状です。でも、「今こそらいてうの出番」です。今年「青鞆百年」の事業を成功させ、それからどうするか厳しい検討をしたいと思います。みなさまのご協力をお願い申し上げます。

### 今年度役員

会長・米田佐代子、副会長・折井美耶子、木村康子、中郷邦、堀江ゆり、事務局長・小林明子、理事・飯村しのぶ、井上美穂子、植草充代、小野塚歩、木村見江、小池道子、小林典子、斉藤慶子、坂口久美子、佐藤実喜子、杉山洋子、関町好子、富松裕子、花岡静枝、藤原美津子、三留弥生、山田繁子、監事・小島妙子、佐久間由美子（新）

### 「青鞆」100周年事業募金の訴え

今年の青鞆創刊100周年記念事業のために、一昨年のご寄付の一部と高良留美子さんの女性文化賞賞金、大河内昭子さんからの「青鞆百年御祝」のご寄付を併せて200万円を積み立ててきましたが、9月4日のイベント、9月10日の国際シンポ、12月予定される東京文京区（青鞆発祥の地）での展示と講演会、さらに紀要の記念特集号印刷費、現地の施設整備などの費用として、長野県からの助成金のほかに約250万円必要です。まことに恐縮ですが、50万円の募金を募らせていただきます（1口1000円。何口でも）存じます。みなさまのお力添えをどうかよろしくお願い申し上げます。



講師のまわりも、つめかけた参加者でいっぱいになりました。

らいてう講座Ⅰ

●小宮山量平さん

煤煙事件の真実と森田草平を語る ①

6月25日(土)、70人を超える集まりとなった上田駅前のエディターズミュージアムで、5月に95歳を迎えられた小宮山量平さんは、東日本震災後の日本への想いに繋げながら、歌も入って豊かに語ってくださいました。今回はその一部、煤煙事件についてのご紹介です。

『森田草平選集』の月報に林田茂雄が、16歳で『煤煙』を読んだ時、この恋愛の正体が分からなかった、そもそもこの二人は、肉体の関係をしたのかしなかったのかと書いている。この疑問は大方の人の疑問でもあるだろう。漱石は、まったくの新人である草平を自分の跡継ぎの作家として朝日新聞に推薦した。草平がその時代に、どうい

問題を抱えて生きたのか、らいてうはそれを受けてどのような心構えを持って草平さんと対峙したかというところが、今日においても重要な問題なのではないか。草平は岐阜の裕福な地主の子として生ま

れ、「豆と女はそばには置けぬ、すぐに手が出る」というような農村の男社会をいき抜いた青年であった。その彼が、東京に出てぶつかった教養の世界で、イギリス文学、特に「ガリバー旅行記」を通して、人間のモラルを築くこと、悟性の発達した人間、自分の足で立ち、自分の頭で考える人間になるという課題を持った。そうした理想主義に燃えたとき男は肉体関係がどうかというところに頭が及ばない。らいてうさんにしても、この男といつしよに暮らせるかと考える暇はなかったろう。林田さんの疑問についていえば、それは当人同士のこと、勝手にしなされ、それ以上は差し出がましいということではないか。煤煙事件の真相を知るためには、男女関係を悟性的基盤で考えなければならぬ。

(三留 弥生)

らいてう講座Ⅱ

●米田佐代子さん

『青鞥』に登場した信州の女性たち

6月26日、昨年オープンした真田図書館多目的室で米田館長を講師に、『青鞥』に登場した信州の女性たちの活躍ぶりを学びました。『青鞥』創刊100年の今年、「元始、女性は太陽であった」のことは有名だけれど、さて、その中身は……。

若き日のらいてうが現実にはぶつかった「女だから」というカベに悩み苦しみながら、「後ろを振り向かず」「自分の主人は自分自身だ」と自覚して、「新しい女の手で新王国をつくろう」と訴えるに至ったプロセスが表現されていて、その再生



男性も多数参加。図書館職員のみならず、皆さんの協力もあり、たのしいひとときでした。

の舞台になったのは、実に信州であったという。それから3年後『青鞥』は、有名、無名を問わず多くの女性たちの魂の叫びをのせて、「大逆事件」から「大正デモクラシー」の時代を駆け抜けた。50年前、『青鞥』の本当のことがわかるのは、これからだ」とらいてうはいつている。でもそれからさらに50年たつたいま、その仕事はまだまだ実っていない。わたしたちが「らいてうの家」を開いて考えたかったのは「その本当のことだ」と、米田さんという。

当時、『青鞥』に登場した人数で多いのは、東京について長野県だという。上田出身に、龍野ともゑ、世良田優子がいる。加藤みどり、五明倭文子、四賀光子、松井須磨子、若山喜志子、久保田ふじ……。

それぞれが問いかけたものは何か。らいてうが85歳まで「後ろを振り向かず」に生きて「人生を支えたのは、「自分で自分の生き方を決める」姿勢だったのだ。(坂口久美子)

文京区の記念講演に田中優子さん

東京・文京区で12月18日に予定されている、『青鞥』イベントに紀要4号にご寄稿下さった田中優子さんが講師に決まりました。次号詳細。

●今年も長野県「地域発元気づくり支援金」の対象事業に

昨年の「夏祭り」に引き続き、らいてうの家の事業が長野県から助成を受けることになりました。期待と責任の大きさを実感。がんばりましょう！

笹刈りのつどい

7月24日(日) 森の講座 10時～11時  
笹刈り 11時～12時(らいてうの森、「家」)  
昼食 12時～13時(長野県葉草園)

(地元食堂のおにぎりランチ500円、希望者は事前申込み)  
高原散策 13時～15時30分(ガイドあり)

\*申し込みは平塚らいてうの会へ(7/11メ  
切。)当日は上田駅温泉口からバスが出ます。

①「青鞥」創刊一〇〇周年記念祝祭

INらいてうの家

日時 2011年9月4日 13時開会  
場所 あずまや高原(らいてうの家)

1、ぞうれっしやがやってきた(しなの子ども  
の幸せと平和を願う合唱団)

2、「過ちは繰り返させませんから」他  
3、独唱 「ハバネラ」「見上げてごらん夜の  
星を」他 (西田ミヨ子)

4、朗読劇 『夏の雲は忘れない』抄 ヒロシ  
マ・ナガサキ1945年(高田敏江、柳川慶

子、長内美那子) 当日上田駅より送迎バス  
あり。

②「青鞥」100周年記念・国際シンポジウム

日時 9月10日(土) 午前10時30分

「青鞥」ゆかりの見学会

午後1時よりシンポジウム

場所 日本女子大学 百年館

主催 日本女子大学「新しい女」研究会

「青鞥」100周年国際シンポジウム実行委員会

「平塚らいてうの会」紀要4号

堀場清子さんや高良瑠美子さんの力作のほか、  
辻井喬さんや田中優子さんのエッセイ。さらに明  
治40年代に若き日のらいてうが親友小林郁宛に送  
った絵葉書を原色で再現、明治のモダン女学生の  
一面がうかがえます。通常号の倍の特大号です。  
(頒価1000円)

◎記録映画「元始、女性は大陽であった」

平塚らいてうの生涯のDVDができました。

日・英両言語対応になっています。頒価は500  
0円。図書館などで使用する場合、ライブラリー  
価格として2万円です。

\*紀要、DVDとも平塚らいてうの会へお申込  
みください。

岸田衿子さんお別れの会

らいてうの家を愛し、応援してくださいだった岸田  
衿子さんが4月7日に亡くなられ、6月26日東京  
で「お別れの会」がありました。谷川俊太郎さん  
の詩の朗読などがあり、ご子息未知さんの「母は  
悲しみを遺さずに逝きました」というご挨拶が心  
にのこりました。らいてうの会から米田・杉山が  
出席しました。

【事務局日誌】

4月4日 紀要第4号編集会議

4月13～14日 「家」掃除・遺品運搬・展示準備

4月20～21日 「らいてうの家」遺品展示完成

4月21日 記録映画を上映する会理事会に出席

4月25日 第7回理事会開催

4月27日 2010年度会計監査を受ける

4月28日 日本母親大会第2回実行委員会出席

4月29日 「らいてうの家」オープン

お茶会とコンサート開催

5月14日 第12回通常総会開催(於東京ウイメン

ズプラザ) 第1回理事会開催/らいて

う忌・築添美可さん・美土さんのお話

あずまや高原自治会総会に出席

5月21日 日本母親大会第3回実行委員会出席

5月26日 9月4日イベント実行委員会(於真田)

6月2日 紀要第4号編集会議

6月8日 事務局会議

6月11日 男女共同参画週間記念講演会米田佐代

子会長の講演(於文京区男女平等セン

ター)

6月23日 日本母親大会第4回実行委員会出席

6月23日 文京区「青鞥」100周年事業(12月)

の実行委員会に出席

6月25日 9月4日(日) イベント実行委員会

(於上田情報ライブラリー)

6月25日 らいてう講座I「森田草平を語る」

小宮山量平さん(於エディターズミ

ュージアム)

6月26日 らいてう講座II「『青鞥』の時代を生

きた女たち」 米田佐代子館長(於真  
田図書館)



左から司会の折井美耶子さん、築添美可さん、築添美土さん。

## 2011年 らいてう忌

### 「祖母の思い出」を語る

今年のらいてう忌は、らいてう没後40年を記念して、らいてうのお孫さんの築添美可さん、築添美土さんのお二人に、話をうかがいました。司会進行は、折井美耶子副会長が務めました。

#### 築添美土さんのお話

私はらいてうの6人の孫の中で一番年下です。祖母が亡くなったのは14歳になる少し前で、最後の2年ほど一緒に暮らしました。小さいときに訪れた祖母の家は安心して過ごせる場所で、祖父母はとても仲の良い二人でした。小学校に入り、一緒に暮らし始めたときは、祖父は既に亡くなり、祖母は一人暮らしをしていました。祖母は話をするのが苦手なので、私の横に立って「おばあちゃんはどう思うわ」と言われたものです、冷たいわけではなく温かい気持ち伝わってきました。

あるとき

「8月15日は何の日か知っていますか?」と聞かれ、「終戦記念日」と答えると、「違うわよ。敗戦記念日よ」と言われたのを覚えて

います。

祖母がやってきたことはよく知らないのですが、大胆過ぎたんじゃないか、もっと周りを見て行動すればよかったんじゃないかと思うこともあります(笑)。でも祖母が自然の流れで生きてきたことは、とても理解できます。

私はあまり学校に行かず、大人に反発し、マンガばかり読んでいました。そんな私に祖母は「本を読みなさい」「勉強しなさい」とは言わずに、「もつと本を読んだら」「勉強は面白いと思うけれど」と言いました。話し終わるとすっといなくなるので、会話になりにくく、こちらの気持ちを聞き出すようなことはありませんでした。

祖母はよくベッドの上で座って瞑想をしていました。散歩に出かけると、たたみいわしとわさび漬けを買って来て、夜にはそれをつまみに、お燗した日本酒を飲んでいました。

母は70歳過ぎまで「らいてうさんのお嬢さん」と言われていましたが、「私はらいてうの娘だからしかたない」といっていました。

#### 築添美可さんのお話

私は美土より7歳年上なので、祖母が亡くなったときは21歳になったばかりでした。祖母は朝起きると洗面所で身支度をして、着物をちよつと楽に着て、朝食が終わると自分の部屋に入って、座ったり書き物をしたりしていました。

私たち家族で滋賀に住んでいた頃は貧しい暮らしでしたが、ヴァイオリンを習いたいというところ、祖母はヴァイオリンを買って送ってくれました。孫がやりたいことは応援してくれる祖母でした。次にバレエを習い始め、小学校2年生くら

いとき、成城の家の応接間でレコードに合わせて踊ったことがあります。祖母との会話は少なかったですが、このように喜んで応援してくれました。

祖父は几帳面なところがあり、道具箱用の設計図が残っていました。母によると、お正月のお餅は定規を当てて切っていたそうです。お正月にお雑煮を食べるときに「美可はお餅、いくつ食べます?」と聞かれて、子ども心に困った思い出があります。

母から祖母のことを聞いたことはありませんでしたが、母は下北沢の駅前に「えとふ」というお店を出していました。「えとふ」で辻潤展を行ったときに、大杉栄と伊藤野枝の娘さん、辻潤と伊藤野枝の息子さん、それにうちの母の三人が初めて出会って、なごやかに話をしたそうです。とても不思議な巡り合わせだと思います。

美可さんは、最後にお母様の曙生さんの文章を朗読してくれました。運動に忙しかった頃のらいてうの帰りを待ちわびる博史と二人の子どもの様子を綴ったもので、美可さんの温かい声は母を思う娘の姿に重なり、会場の人々の胸を打ちました。

#### \*ラジオ深夜便やインターネットラジオでも

##### 「青鞥」百年

3月にはNHKのラジオ深夜便「明日へのことば」で「青鞥」百年がとりあげられ、5月と6月にはインターネットラジオの一つブルー・レディオが2回にわたって「青鞥」とらいてうを紹介しました(いずれも米田会長出演)。